



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	[紹介]佐藤昌介「余の基督者となれる経路」
Author(s)	井上, 高聡
Citation	北海道大学大学文書館年報, 12, 45-52
Issue Date	2017-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65772
Type	other
File Information	ARHUA_12_003_p45-52.pdf



< 資 料 >

〔紹介〕 佐藤昌介「余の基督者となれる経路」

余は幼少の頃より儒教の感化を受けたもので、孝経、大学、中庸、論語、孟子等の經書の素読より始めて輪講を為して、其意義を明らかにすることを教へられたものである。これは正課で、その副課としては、詩作作文と歴史類の読物を読むことであつた。如^{かくのごとき}此教育法は徹底的に人をして孔孟の崇拜者となすことであつた。只、經書の難解の文字を離れて、稍理解し易^{やや}く感じ且壯烈無比の思ひをなして愛読せるものは日本外史の如き戦史類であつて、独り漢文の歴史のみならず、邦文の絵本太閤記の如き稗史でも、好んでこれを読んだものである。小学校の授業も中学校の教育も、余の青少年時代には、未だ形を成さなかつたので、余は全く封建時代の文斗り^{ばか}でなく、武の方の教育も受け、柔剣の如き武術も多少練習をなし、即ち武士道の教育を受けて、明治四年余の十六歳の時に及んだのである。

明治四年一月四日、旧藩¹⁾の設立せる作人館なる藩黌を辞して、留学のために東京に出でたが、目的は英学を学ぶためであつた。当時、東京には尚ほ幕府時代の大儒、芳野金陵²⁾、安井息軒³⁾とか云ふ人々は家塾を開いて弟子を教育してゐた。同時に、洋学の大家福沢諭吉⁴⁾、箕作麟祥⁵⁾と云ふ様な人々も漢学の大家と相對して家塾を開いて居つたのであるが、余は同郷の先輩が居ると云ふので深川の小笠原奨蔵⁶⁾先生の塾に入り、後にそこより一ツ橋外の大学南校⁷⁾にも通学したのであつた。而してその学ぶ所はなにかと云ふに、英学の初歩にしてウイルソン⁸⁾の読本とか、クエツケンボス⁹⁾の文典とか、又は洋算の加減乗除とか、至つてつまらぬものと考へたのである。是迄治国平天下の議論をなし、倫理五常の大道を論じ、治民の大策などを文章となせるものは、子供だましの様な読本を読むことは、如何にも間ぬるく考へたのである。

当時余の父は旧藩の少参事と云ふ役を勤め、引き続き県になつても役向きを以て滞京して居つたが、その蔵書中に、不図も、支那訳の聖書を持つて居つたのである。而して父の所^{はからず}に出入する先輩の書生等は、偶々^{たまたま}ヨーロッパの形勢を談ずるときに普仏戦争に於て仏国が一敗地^{まみ}に塗れたのは、その国民が羅馬^{ローマ}旧教を信じて居り、反^{これにはんし}之普魯西^{プロシア}の国民は基督教の新教を奉じて居ることも、その勝敗を決せる一大原因であると、と云ふ様なことを談じて居たのである。此の頃は未だ町の辻々に建てられて居る制札の中には、第一に切支丹宗門の儀は堅く禁止の事と云ふ一ヶ条がありはしたけれども、^{いやしく}苟も宗教は國家の存亡に関する一要素でありとすれば、彼を知ることは先づ大切な事でありとして、研究心を呼び起されたのであつた。然るに、余は大学南校の寮舎に入りてより、不幸病に罹り、大学病院に入院して、佐藤尚中¹⁰⁾、佐々木東洋¹¹⁾諸先生の診療を受けて数ヶ月の後に全快せるが、大学南校の方の学業は、ために後れたるが為、退学して横浜に至り、修文館¹²⁾に入学したのであつた。館長は星亨¹³⁾氏で、教師はブラウン¹⁴⁾博士であつたが、基督教研究の志望を持つて居つたがために、同博士より英文のバイブル美本一冊を譲り受けたのは、余の持てる最

初のバイブルであつたのである。是は明治五年の春である。当時、横浜の海岸通りに一の教会¹⁵⁾が建てられ、宣教師バラ¹⁶⁾氏が伝道に従事せられ、小川¹⁷⁾氏がその補助者であつた。余も時折りその教会に出席せるが、本多庸一¹⁸⁾氏が二人の青年らを引連れて出席せることを記憶して居る。余と同年代の一青年も頼て出席者の一人で、余の下宿にも屢々^{しばしば}尋ねて来たり、共にバイブルを読んだこともあり、親しき間柄になつたが、此の人は、後に基督教界の元老となつた植村正久¹⁹⁾氏である。

余は横浜在学中、家事上の都合にて帰県して、盛岡又は郷里花巻に一ケ年斗り居つて、明治六年秋上京せるが、上京後再び要事あつて折り返し帰京の見込にて帰県せるに、不図も郷里花巻にて、希臘教の伝道師大立目某²⁰⁾氏が頻りに熱心に伝道せるため、郷里の先輩も大に研究心を起して居るに際会したのであつた。この頃、余は天道遯原を読んで深く感ずる所あり、大立目氏と屢々^{るる}基督教の教理に就き、議論を闘はしたのであつた。一日閑を得て近在の温泉に行きしに、此処にては一人の禅僧と知合になり、仏教の禅理などを試問する所があつたが、逆も基督教の活きたる宗教と人間味を離れたる禅宗とは比較出来ぬと思つた。併し此禅僧は、後に知名の僧となつた永平寺の西有穆山²¹⁾禅師である。

余が帰京の途に就くに当たり、大立目氏は頻りに余に勧むるに、帰京の上は駿河台にニコライ²²⁾教師を訪問すべきことを以てした。その頃は大会堂²³⁾は未だ建築せられて居なかつた。ニコライ教師は小さき旗本屋敷位の家に住居して居つた。余の訪問を喜んで、一室を提供するから居れと云はれたのであつた。当時同郷の書生等は、大勢ゴタへ下宿屋に居つた時であつたから、余はニコライ教師の勧めを喜んで受けて、一室を借りて同居人となつたのである。屋敷の下の方には、神学校の寄宿舍があつて、舎生が時々集會を催して、布教宣伝の事などを相談するのであつた。余は独立せる客分の如きもので、何にも布教上の相談には関係はなかつたが、時偶々^{ときたま}、ニコライ教師の崇高なる人格に接して啓発する所あつた。其内に、文部省の主管で東京外国語学校²⁴⁾が生徒を募集せるに際して、余も受験者の一人となり、及第して五級に編入せられた。而してニコライ教師には是迄の好意を感謝して、学校の寄宿舍に入つたのである。是は明治七年の春である。顧みるに、明治四年、大学南校に入学せるときに同学者であつた人々は、開成学校²⁵⁾の学生となりて学問も専門の科を修むる様になつて居つて、余は殆んど晩学ではないかと感じたのであつた。是は余の十九歳の時である。併し忍耐を以て勉強して、明治九年七月その科程を修了して、開成学校に進入することが出来ることになつたのであるが、当時の同学生には、後に一代の大学者となり、名教育家となり、又は國務大臣ともなつた人もあり、多士濟々であつた。余もその驥尾に附して開成学校に入り、明治十五年の東京大学卒業生となつて居つたならば、余の生涯は全く今日と異なる経路を辿つて居たであらうと想像さるるのである。

明治九年七月初旬と覚ゆ。外国語学校より分れた東京英語学校²⁶⁾第一級の教室に、一人の老紳士が二人の青年紳士を同伴して、受持教師スコット²⁷⁾氏を訪うて、授業を參觀せられたが、此日は実に余の生涯の方向を転換せしむる日であつた。老紳士は誰れあらう、即ちクラーク²⁸⁾博士で、開拓使の招聘に応じて新たに來朝して、札幌に農科大学を組織する

使命を帯びて居つたのである。而して、英語学校の卒業生を物色して、その志望者を入学せしむるのであつた。これが為、開拓使より文部省に照会して、その了解を求めたのであつた。その結果、クラーク博士は親しく授業を参観することになった訳である。英語学校には英米両国より雇入れたる多数の教師が居つたけれども、クラーク博士の人品權威と同日の比にあらずして、流石は米国に於ける一流の専門大学の学長たる貫目はあつたと後に思ひ知られたのである。

開拓使の募集に応じて志願せる同志は、第一級より九人あつた。開成学校より一人加はり、都合十人形式斗りの試験を通過して、クラーク博士一行と共に御用船玄武丸に搭乗して、品川沖を乗り出したのであつた。之より先き、余等の志望を発表するや、学校当局は極力その志望を翻^{〔服〕}がへさすべく努むるのであつた。殊に余に対して神部(一三)²⁹⁾副校長は、留まりて開成学校に進むべく壅諭するのであつた。余は今も尚その深切を忘れぬ。併し余は元来東北人で、幼年の頃より蝦夷地の事を聞知して居り、秋になりて鴻雁が北より帰るを見ては、北雁帰ると何となく床しく思つて居つたこともあり、函館戦争で人の往来の頻繁となつたことも記憶し居り、又明治五年及六年の大半を家事上のため就学出来ずして稍晩学となつた感もあり、また開成学校の六ケ年は稍長きに過ぐるとも思はれ、更に学資の心配もなきことなれば、何となく新天地を北海道に於て開拓して見たき心持となり、遂に勇気を鼓して東京を跡にして渡北したのであつた。然るに一の躓きが船の函館に入らざる前に起つたのである。御用船には黒田³⁰⁾長官も乗船して居つて、クラーク博士と共に食堂に於て屢会谈するのであつた。それとは知らずに、余等学生中には食堂の上の甲板に横臥して放歌高吟誰憚る所なく勝手な振舞をなしたのであつた。それが黒田長官の耳に聞え目に見えたのであつたからたまらない、長官は憤然として学生の取締であつた森源三³¹⁾氏を呼寄せ、如^{かくのごとき}此乱暴をして礼儀を知らぬ学生は、札幌に連れ行くに及ばぬ、函館より東京に戻せとの厳命である。サア騒ぎは大きくなつて如何にこれが納まるか、一言云ひ出せば後には退かぬ黒田長官の氣象の事故、船中色を失つたのである。これがクラーク博士の知る所となり、一転して教育の真意義を黒田長官と談ずることとなりて、教育の要は農工の技芸を教へるのみが本旨でなく、人を作るに在り人格者を出すにあり、と論ずる所ありしが、然らば博士は此等の学生に感化を及ぼしてその品性を陶冶することは出来るやの問に対して、無論それは教育者の本領であるとの答を得て、黒田長官は翻然として悟り、一切の教育を挙げてクラーク博士に托することになり、此難局は治まり、学生も函館より引返すことなく、小樽に続航して札幌に着いたのであつた。

玄武丸の難局は、クラーク博士が教育家の立場よりこれを治めた訳であるが、なほ残された一の問題がある。それはクラーク博士は如何なる教育法によりて、荒みたる青年の心を感化して道念を發心せしむべきや、との事である。クラーク博士は、基督教の信仰を以て感化せしむ、と云ふことを云ひ出でたのである。黒田長官はこれを聞き、それは困まる、基督教は未だ我邦に於て公認せられて居らぬ、それは許す訳には参らぬ、クラーク博士を模範として実践躬行を以て感化して貰ひたいと云はるゝのであつた。併しクラーク博士

は、余の一言一行は基督教に依るのである。余にして教育の大任を果さんと欲せば基督教の信仰は一日も離るる能はざるものであると主張して、中々譲る所なきを以て、遂に黒田長官も我を折りてこれを黙認する所となれるを以て、クラーク博士は横浜の聖書会社より托されたる英文聖書を学生各自に与へられ、毎朝教室に於て授業の開始前十分間斗り、これを読み説明されたのであつた。而して身を以て範を示して、飲酒を止め、同僚学生と共に禁酒禁煙禁賭博の誓約³²⁾を立てたのであつた。恐らくは、これは我邦で最初の禁酒誓約であらうと思ふ。

それでは、教師の威権を以て之等のことを強制したのかと云ふに、決してさうではなかつたのである。クラーク博士の感化は精神的であつて形式的ではなかつた。博士と学生の間は常に和氣霽然たるものあつて、教室に於て又は野外に於て、又は自宅訪問の際にても、更に間隔はなく、師となり友となり、その引付ける力は偉大なるものがあつた。殊に、イエスの愛を説くその熱誠は溢るる斗りであつた。余の如きは、天道遡原的の理論より神の存在を認めて、英語学校在学中にも築地の海岸教会に説教を聞きに参つたこともあるが、クラーク博士の説く所を聞いて始めて、救世の道は人々の、人も我も共に温かきイエスの愛に接触することを得るもので、是ぞ真の愛である、神は冷たき存在者でない、と云ふことを信ずるに至つたのである。

クラーク博士は、明治九年の八月より翌十年の四月迄やつと九ヶ月間、札幌に居られたのであるが、その間全力全身を学生教育のために捧げたのである。学生の寄宿舎には時ならぬときに音づれて、学生を驚かすこともあり、また学生の討論会にも出席して批評を下すこともあり、又採集函を携さへて野外に採集を共にすることもあり、斯る間にその語る所は教訓ならざるはなく、或は自然科学的に亘るあり、或は精神的方面又は信仰談に関することもありて、知らず識らず、その偉大なる感化を受けて居つたのである。されば博士の帰国の期迫るに当つて、一の信仰箇条を認め、余等にその署名を求められたのであつた³³⁾。それは“Believers in Jesus”即ちイエスの信者と称するものであつて、当時札幌には教会もなく、宣教師も居らず、独り学校に於てのみ福音の声を聞き救の光を認めたのであつた。その署名者にして現存せるものも少くない。五十余年の昔の事であるから、皆白髪の老人である。クラーク博士出発の節には、学生等も騎馬にて、開拓使の大官等と共に、札幌の郊外四、五里の所に博士を見送つたものだ。そのときに博士はその乗れる駿馬に一鞭を加へて駅頭の坂を登るときに、学生の一隊を顧み“Boys, Be ambitious”と呼んで去つたので、今も尚ほ凜として耳朶に在るが如く覚ゆ。当年の青年今は白頭でも、元氣旺盛で大志を地上にまた天上に抱かねばならぬと思ふのである。十年九月二日、ハリス³⁴⁾氏より受洗せるもの十六人あつた。

〔注〕

- 1) 南部氏が治めた盛岡藩。
- 2) よしのきんりょう、1803-1878年。下総国相馬郡（千葉県）出身の儒学者。昌平黌・昌平学校教授を務めた。
- 3) やすいそっけん、1799-1876年。飢肥藩（宮崎県）出身の儒学者。昌平黌・昌平学校教授を務めた。
- 4) ふくざわゆきち、1835-1901年。中津藩（大分県）出身の洋学者。慶應義塾を創設。
- 5) 箕作麟祥（みつくりりんしょう）、1846-1897年。津山藩（岡山県）の蘭学者の家に生まれた。洋学者。和仏法律学校（現在の法政大学）の初代校長。
- 6) おがさわらしょうどう。不詳。
- 7) 江戸幕府直轄の教学機関であった昌平黌（昌平坂学問所）をルーツとする、明治維新政府設置の洋学校。1877年に大学東校と合併して東京大学となった。
- 8) Marcius Willson、1813-1905年。アメリカの教育者。子ども向け英語読本を多く編纂した。日本では英語初歩教科書「ウィルソン・リーダー」として普及した。
- 9) George Payn Quackenbos、1826-1881年。アメリカの教育者。中初等用教科書を編纂した。英語教科書、西洋科学の初歩解説書として日本で普及した。
- 10) さとうたかなか、1827-1882年。小見川藩（千葉県）出身の蘭方医。大学東校初代校長、順天堂第2代堂主などを務めた。
- 11) ささきとうよう、1839-1920年。江戸出身の洋方医。東京医学校（大学東校を改組）病院長などを務めた。
- 12) 横浜の洋学校。星亨、S. R. ブラウンらが教師を務めた。札幌農学校第2期生宮部金吾、第4期生佐久間信恭らも在学した。
- 13) ほしとおる、1850-1901年、江戸出身。横浜税関長、弁護士を経て自由党に加わり、衆議院議長、通信大臣などを務めた。
- 14) Samuel Robbins Brown、1810-1880年。アメリカ・オランダ派改革派教会の宣教師。1859-1867年来日、1869年に再来日した。後にブラウン塾を創設した。
- 15) J. H. バラが中心となって横浜で設立した日本基督公会を示し、小会堂などで礼拝を行なった。後に大会堂を建築し、「日本基督横浜海岸教会」と改称した。
- 16) James Hamilton Ballagh、1832-1920年。アメリカ・オランダ改革派教会の宣教師。1861年来日し、横浜で布教活動を行ない、横浜バンドの基盤を築いた。
- 17) 小川義綏（おがわよしやす）、1831-1912年。日本基督公会を設立して長老となった。日本最初のプロテスタント牧師。
- 18) ほんだよういつ、1849-1912年、弘前藩（青森県）出身。J. H. バラから受洗したキリスト教伝道者。青山学院第2代院長、日本メソヂスト教会初代監督などを務めた。
- 19) うえむらまさひさ。1858-1925年。J. H. バラから受洗したキリスト教伝道者、神学者。長老派の日本基督教会を指導し、日本のプロテスタントに大きな影響を与えた。
- 20) おおだつめけんご、1848-1920年、仙台藩（宮城県）出身。戊辰戦争後、函館でロシア正教会の修道司祭ニコライの教えを受けた。後に宮城県で自由民権運動に参加した。
- 21) にしありぼくざん、1821-1910年、八戸藩（青森県）出身。曹洞宗の僧侶、總持寺独住3世貫首を務めた。
- 22) “Nicholas of Japan” と称される。1836-1912年。ロシア正教会の聖人。1861年来日して函館、東京などでロシア正教布教を行ない、日本正教会を創建、大主教となった。
- 23) 東京の千代田区神田駿河台の東京復活大聖堂（通称「ニコライ堂」）のこと。
- 24) 大学南校から語学課程を分離して、1873年に設立した官立の外国語学校。大学南校の専門課程を引

- き継いだ開成学校の進学課程に当たった。東京大学のルーツ校の一つ。
- 25) 大学南校から専門課程を引き継いで1873年に設立した官立の高等教育機関。1877年に東京医学校と統合し東京大学となる。東京大学法・理・医学部のルーツ校に当たる。
- 26) 1874年に東京外国語学校の英語科が独立した官立学校。後に大学予備門、第一高等学校と改組を繰り返す。
- 27) Marion McCarrell Scott、1843-1922年。お雇い外国人教師として1871-1881年に来日したアメリカ人。東京外国語学校などの英語教師を務め、師範学校で教育学を講じた。
- 28) William Smith Clark、1826-1886年。開拓使から招聘を受け、1876-1877年に来日したアメリカ人。札幌農学校初代教頭を務め、植物学、英語を講じた。
- 29) 服部一三 (はっとりいちぞう)、1851-1929年、長州藩 (山口県) 出身。東京外国語学校校長心得を務めた。後に岩手・広島・長崎・兵庫県知事を歴任、貴族院議員となった。
- 30) 黒田清隆 (くろだきよたか)、1840-1900年、薩摩藩 (鹿児島県) 出身。1870-1874年に開拓次官、1874-1881年に開拓長官を務めた。1887-1889年に第2代総理大臣に就任。
- 31) もりげんぞう、1836-1910年、長岡藩 (新潟県) 出身。札幌農学校開校の際に校務を担当し、1881-1886年に校長を務めた。後に北海道選出の衆議院議員となった。
- 32) 1876年11月29日付けで札幌農学校のW. S. クラーク以下の教員と第1期生が結んだ、所謂「禁酒・禁煙の誓約」のこと。薬用以外の阿片、煙草、酒類、賭博、冒瀆的な悪口を禁止した内容であった。
- 33) 1877年3月5日付けでW. S. クラークが起草し、第1期生が署名した「イエスを信ずる者の誓約」のこと。キリスト教を信仰することを約束する内容であった。
- 34) Merriman Colbert Harris、1846-1921年。アメリカ・メソジスト監督教会の宣教師。1873年に来日し、1882年まで函館などで布教に当たった。1904年に再来日した。

[凡例]

- 1、漢字の旧字体・異体字を基本的に常用の新字体に改めた。
- 2、文意の通じにくい誤字には、正字を [] にいれて誤字の上に付した。
- 3、読みの難しい漢字には振り仮名を付した。

【 解 題 】

井上 高聡

1. 佐藤昌介「余の基督者となれる経路」について

佐藤昌介「余の基督者となれる経路」は、松本卓夫編『日本人の観たる基督』（『基督教思想叢書』第3輯第4巻、新生堂、1931年1月）所載の著述である。『日本人の観たる基督』には、佐藤のほかに山室軍平、海老名弾正を含む計10名の当時の著名なクリスチャンがプロテスタント信仰についての文章を寄せている。編者の松本卓夫（1888-1986年）は日本メソヂスト教会牧師で、神学者である。戦前期には青山学院神学部教授などを務め、その後、広島、藤沢などで活動している。

佐藤は、この書籍に「余の基督観」と題し、「一 余の基督者となれる経路」で幼少期の勉学から札幌農学校でW. S. クラークの教えを受けるまでの経歴をキリスト教との出会いを中心に回想し、「二 余の現在の基督観」では聖書の内容や賛美歌の歌詞を引きながら自身のキリスト教信仰について記述している。佐藤は1930年12月に北海道帝国大学総長を退任しており、この著述はその前後の時期のものに当たる。本稿では、佐藤が札幌農学校へ進学した経緯を詳細に回想している「一 余の基督者となれる経路」を翻刻した。

2. 佐藤昌介のキリスト教接近と札幌農学校進学

「余の基督者となれる経路」の内容で非常に興味深いのは、明治維新政府が1872年に「学制」を制定して教育制度整備に着手し始めた時代、裏を返せば未だ十分に教育制度が整っていない時代、当時のエリート青少年たちがどのように勉学に向かっていたかを記している点である。さらにキリスト教へのアプローチがその一経路として明快に説明されている点である。

当時、武士層の素養は漢文であり、殊に国家を如何に治めるか（「治国平天下」）を講究する儒学の影響が大きかった。佐藤をはじめ幕末期に生まれた武士層のエリートたちは、同時に洋学へ関心を向けた。しかし、未だ体制が整っていない明治維新政府の教育政策において、中等・高等教育機関の整備は一層遅れており、官立学校で学ぶことができる洋学は英語の初歩が中心で、教材はアメリカで使用される初等・中等レベルの英語教科書・読本であった。幼少期から天下国家を論ずる教育を受けてきた者は、当然、張り合いなく感じた。西洋についてより深く知りたいと思うとき、それに熱心に応え得る数少ない存在が、来日していたキリスト教伝道師であった。そうした背景から、佐藤は横浜のキリスト教宣教師が教える私塾に通い、キリスト教に近付くこととなった。

佐藤が東京外国語学校を辞めて、札幌農学校へ入学する経緯も似た点がある。文部省に

よる高等教育機関の体制がある程度整うのは、1877年4月の東京大学設立を待たねばならなかった。札幌農学校ではその前年1876年8月の開校が決まり、しかも、W. S. クラークほかの専門的な学術を教授する外国人教師が既に来日していて、高等教育機関としての体制がより早く整いつつあった。佐藤ら東京で学んでいたエリート青少年たちは、先行きが今ひとつ見え辛い東京において勉学を続けるよりも、当時は外国にも比し得る程に遠い北海道札幌への渡航を敢えて決意するに至った。

今すぐに、確実に、より深く学びたいという彼らの向学心が、キリスト教へ近付け、札幌へ渡る決意を促した一因であったと考えられる。

3. 佐藤昌介について

佐藤昌介(1856-1939年)は、現在の岩手県花巻市で盛岡藩士の家に生まれた。少年期に掛けて、藩校作人館、東京・横浜の官立学校や私塾に学んだ。東京外国語学校在学中に札幌農学校初代教頭となるW. S. クラークのスカウトに応じて、1876年8月に札幌農学校第1期生として入学した。札幌農学校入学時に19歳と第1期生の中では年長に当たり、成績も優秀であったため、在学中は第1期生のリーダー格であった。

1880年に札幌農学校を卒業後、一時、開拓使に就職したが、1882年に開拓使が廃止となったのを契機に、私費でアメリカへ留学した。メリーランド州ボルティモアのジョンズ・ホプキンス大学に入学し、主に経済学と歴史学を中心に学んだ。1886年、ジョンズ・ホプキンス大学に論文“History of the Land Question in the United States”(アメリカにおける土地問題の歴史)を提出し、博士号(Ph. D.)を取得した。

同年に帰国する共に、札幌農学校教授に就任し、農業経済学・植民学などを講じた。翌1887年に幹事、1891年に校長心得を兼任し、札幌農学校経営の中枢を担うこととなった。1894年に札幌農学校長に就任して以降は、東北帝国大学農科大学長・北海道帝国大学総長として、四十年にわたって牽引役を務めた。この間、学校廃止の危機を回避し、帝国大学への昇格、農・医・工・理学部を擁する大学への拡充などを実現した。また、制度的に想定されていなかった女性の帝国大学進学を支持し、女性が研究することを奨励した。1918年に加藤セチが北海道帝国大学農科大学(農学部)へ全科選科入学する際には後押し、女性が北海道帝国大学へ入学する道を開いた。

佐藤の逝去後、1939年6月に北海道帝国大学は大学葬をキリスト教形式で実施した。佐藤が長く帝国大学総長を務めたこと、戦時下という時代であったことを考え合わせると、帝国大学がキリスト教形式でセレモニーを行なったことは極めて異例であった。佐藤が大学にとって如何に大きな存在であったかということと共に、極めて信仰厚い人物であったことを示していると言える。

(いのうえ たかあき／北海道大学大学文書館員)